

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

福島県教育支援ボランティア活動報告②

日本教職員組合 杉山 繁

8月3日(水)～7日(日)の5日間、島根・大阪・沖縄の仲間とともにボランティア活動を行いました。今回は小学校・中学校・高校・特別支援学校の教職員で構成されており、どんな子どもたちが来ても対応できる層の厚いチームでした。

ちょうど同じ時期、福島県を会場に全国高等学校総合文化祭(ふくしま総文祭)が開催されていた関係で宿舎が確保できず、福島市と郡山市にそれぞれの単組が分かれて宿泊しました。そのため、情報交換が十分にできず、大変苦慮しました。

また、避難所や仮設住宅で生活している子どもたちを対象に、全国からさまざまな体験活動(旅行)の募集が来ています。この5日間は、そのピークの時期でもあり、川内村の子どもたちも、北海道に出かけていたという状況でした。さらに、中学生は修学旅行中でした。

しかし、JTUのロゴの入ったTシャツを着て自分たちのところにやってくる人たちは、全国各地の先生たちという認識も広まり、子どもをはじめ、保護者の方々にも安心感や信頼感を生み、絆も強くなったように感じました。

○あづま総合運動公園(福島市)

前回(第2ターム)と比べると、明らかに避難所で生活する人が減っていました。秋には閉鎖されることから、仮設住宅や借り上げアパートなどへの引越しが続いているそうです。私たちのところに、母親とともに一番最初にやってきた小2の子も引越しをしていました。原発事故後、確かこれが4回目の引越しになるはずです。避難所という特殊な環境の中での生活、またいつかは引越さなくてはいけないという落ち着かない生活、せっかくできた友たちとの別れ、引越すたびに転校など、子どもたちの心を思うと、切なさで胸が張り裂けそうになります。この子たちが自分の人生をしっかりと歩いていけるように、私たちおとなは、最後まで援助の手を休めるわけにはいきません。

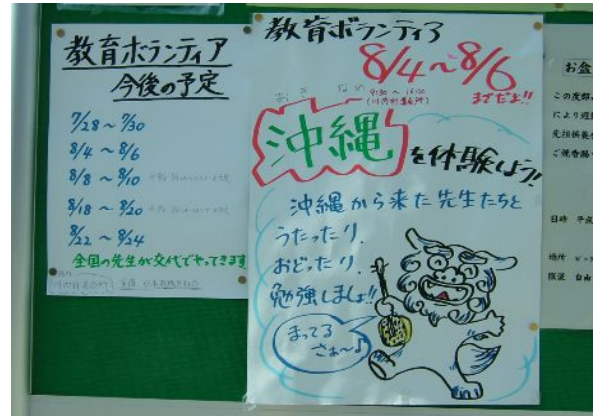
また、中学生や高校生の姿が比較的多いのも前回とは違った風景でした。そのため、郡山から急遽、高校の仲間に来てもらったりもしました。十分な時間はありませんでしたが、層の厚さを発揮できた一場面でした。



○ビックパレット仮設住宅（郡山市）

元々ここで生活している子どもが少ないことから、新たなポスターを掲示板や川内村の災害対策本部（仮役場）に貼り出し、呼び込み活動から始めました。また、子どもが来なかった時には、避難所でのボランティアを手伝わせてもらおうと、富岡町の教育委員会にも挨拶に行きました。

集会所に来る子どもの中に、最初（第2ターム）から私たちとのふれあいを楽しみにしてくる3・4歳の男の子がいました。赤ちゃんを背負ったお母さんと来るのですが、お母さんに用事があるときには、私たちが預かるかたちになりました。教育委員会の方との話の中で、「避難生活という状況の中で、一日中、子どもと一緒にいることに悲鳴をあげている親がいます。教育委員会に、子どもを預けるような場所を作ってほしいと訴えてくる人もいます。そうした中、少しでも子どもが親の手から離れる時間をつくってくれる皆さんのような活動は本当にありがたい。」と感謝のことばをいただきました。実は、これも私たちの活動の目的の一つでした。計らずも現地のニーズと合致した活動に自信をもちました。今回は、副村長が激励に来てくれました。



○稲川原仮設住宅（郡山市）

ここは、いつも変わらず多くの子どもたちが待っていてくれます。午前は勉強、午後は遊びの基本がしっかり根づいており、子どもたちも規律ある生活を送っています。夏休みのドリルを終わらせてしまった子どもも多く、絵や工作の宿題を手伝ってもらっている様子もみられました。また、ビックパレットから沖縄の仲間に応援に来てもらい、ダンボールでしめ太鼓を作り、三線との合奏で、ひととき、沖縄の風を感じました。

子どもの数が多く、室内遊びが窮屈なこともあり、短い時間、外でキャッチボールやバスケットボールのまねごとをした時もありました。保護者の中には、「普段の生活でも外に出ているのだから、外で遊んでもかまわない。」と言う人もいるし、「少しでも放射線を浴びる時間を減らしたいから、外遊びはちょっと…」と言う人もいます。放射線については専門家の間でも議論の分かれる難しい問題です。子どもたちとのふれあい方を考えた場面でした。

